

## 『無上黄籙大齋立成儀』の普渡

松本浩一\*

The Universal salvation in  
“Standardized Rituals of the Supreme Yellow Register Retreat”

Koichi MATSUMOTO

## 抄録

普渡の儀礼は死者一般、特に孤魂（日本でいう無縁仏）に広く食を施し救済に導くことによって、彼らの祟りを避けることを目的とした儀礼で、現在でも広く行われている。この論文では、この儀礼の形が整えられた宋元時代に比較的早く出現した、『無上黄籙大齋立成儀』に見られる、普渡儀礼の構成を明らかにし、仏教の普渡儀礼に関する儀軌と比較しながら、その影響について考察したものである。ここでははじめに普渡儀礼の研究動向を概観し、『無上黄籙大齋立成儀』の著者と主な内容について述べた後、この文献で記述された普渡儀礼を大きく「召魂」、「疾病の治療」、「沐浴」、「施食」、「説教」、「鍊度」、「伝符・授戒」の部分に分けて、特に各々の場面で神々に奏上する文書や、唱える呪文、符などの内容に注目して構成をたどっていき、最後にその手続きの流れを概括した後、仏教の普渡の儀軌である『瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口儀軌経』に記された儀礼と比較し、それぞれの特色について論じた。

## Abstract

In China the Universal salvation has been attached importance, which is performed to give consecrated meals to hungry ghosts and relieve them, who are apt to bring curses. This paper intends to make clear the construction of the Universal salvation in “Standardized Rituals of the Supreme Yellow Register Retreat”, which has been compiled early in Southern-Song Period, in which Taoist Universal salvation rites were for the first time described in completed style. In this paper the Universal salvation are divided in ‘summoning the dead souls’, ‘curing their disease’, ‘bathing’, ‘giving meals’, ‘preaching’, ‘sublimation’, ‘giving passports to Heaven’, and paying attention to documents, which are reported to Heavenly gods, spells and contracts, the construction of each rite is investigated. After surveying the whole story, it is compared with the Buddhist Universal salvation rites, and characteristic of each rites are investigated.

\* 筑波大学図書館情報メディア系  
Faculty of Library, Information and media Science  
University of Tsukuba

## はじめに

中国においては、古い時代から祀られない靈魂についての供養の必要が指摘され、その引き起こすたたりについて恐れられてきた。たとえばしばしば引用される『春秋左氏伝』昭公七年の条には次のような話が収められている。

鄭の人が殺された伯有のたたりを恐れていたが、子産が彼の子を跡継ぎに立てて彼の霊を慰めるとたたりが収まった。子産はこれに対し「死者は帰るところがあれば、たたりはしない。私は帰るところを作ったのだ(子を立てて、彼が祭祀を受けられるようにしてやったことをいう)」といった<sup>1</sup>。

またその次の記事では、子産が「庶民の男女でも(匹夫匹婦)非業の死を遂げると、その魂魄は人に憑依してたたりをします」といっている。すなわち死後に祀る人がいなかったり(孤魂)、非業の死を遂げたりした(厲鬼)靈魂に対する恐れは、この時代から存在していたことを示している。

このように子孫が無く祀られない靈魂である孤魂や、非命の死を遂げたため特に恨みを抱いている厲鬼などは、たたりを引き起こしやすい存在として恐れられていたため、彼らに対しては様々な対処の方法が講じられてきた。現在でも、彼らの供養を行う普渡は、あるいは中元節の時期に、あるいは醮や札斗法会など人々の平安を願って行われる儀礼の一部として、様々な機会に挙行されている。

この論文では、南宋に成立した『無上黄籙大齋立成儀』(以下「立成儀」と略称)に収められた儀礼書によって、普渡儀礼全体の過程を「召魂」、「疾病の治療」、「沐浴」、「施食」、「施食後の説教」、「鍊度」、「伝符・授戒」の順序に従ってたどっていき、その構成を明らかにする。さらに道教の普渡儀礼がその範例としたと思われる仏教の普渡儀礼の構成と比較し、道教の普渡儀礼および死者のための儀礼が形成されていく過程について考察していきたい。

後述のように、宋から元にかけての時代には、多くの儀礼書が編纂されたが、中国や台湾での研究は、現在行われている普渡儀礼についての研究が多い。自身全真教の伝統を伝承する道士でもある閔智亭氏は、『太上清微濟煉救苦鐵罐鴻儀』というテキストによる普渡を解説している<sup>2</sup>。また同様に彭理福氏<sup>3</sup>、任宗權氏<sup>4</sup>なども同じく『太上清微濟煉救苦鐵罐鴻儀』に基づいて普渡を説明している。袁瑾氏の研究は、主として仏教・道教音楽に重点を置いたものであるが、やはり北京白雲觀の「鐵罐

施食」の儀式を詳細に分析している<sup>5</sup>。張澤洪氏によれば、現在陝西・甘肅・四川の道教では『太上濟煉鐵罐施食』、江南の全真教では『薩祖鐵罐煉度施食焰口』<sup>6</sup>が、江南の正一派では『先天斗姆煉度金科』が、香港の全真教では『先天斛食濟煉幽科』が用いられているという<sup>7</sup>。陳耀庭氏は、『先天斛食濟煉幽科』と『太極靈寶祭煉科儀』(氏によれば蘇州の正一派に伝わるという)、『先天斗姆煉度金科』の三つの普渡に関する儀礼書に関して、その構成や儀文の異同について分析しており、詩句においてはかなり相違があるが、儀式の構成については共通のところが多いとしている<sup>8</sup>。香港で用いられている『先天斛食濟煉幽科』については、黎志添氏が詳細な紹介を行っており、この儀礼の構成について『太極靈寶祭煉科儀』との比較を行い、陳耀庭氏がこの書が金允中『上清靈寶大法』に由来するとする見解に対し、広州三元宮道士の製作によるものとしている<sup>9</sup>。

また『先天斛食濟煉幽科』の内容については、大淵忍爾氏によって全文が紹介されているが<sup>10</sup>、儀礼や内容についての解説はない。またここには正一派の普渡の儀礼書も全文が掲載されている<sup>11</sup>。徐宏圖氏、薛成火氏は正一派の三日間にわたる普渡の詳細な報告を行っており、その中でもこれらの儀礼が『靈寶領教濟度金書』の伝統を引くことが述べられているが、具体的にその対応関係が論じられているわけではない<sup>12</sup>。

これらの現在の普渡儀礼の紹介・研究においては、その淵源となる宋代の儀礼書についても言及されていることが多いが、いずれも現在の普渡に見られる個々の儀礼の由来をたどるためのものであり、宋代の儀礼の構成・内容を論じたものではない。宋代は現在中国各地で行われている道教儀礼の出発点になる時期であり、多くの大規模な儀礼書が編纂されているから、儀礼の源流をたどる際には、この時代の文献を参照する必要がある。筆者は台湾・香港においてこの普渡の現状について調査を行う一方、宋代を中心にその儀礼の成立過程をたどる作業を行ってきた。

2008年5月に香港・中文大学で行われた「中國地方儀式比較研究國際學術研討會」に提出し、その後『中國地方宗教儀式論集』の中的一篇として出版された論文では<sup>13</sup>、「立成儀」、金允中『上清靈寶大法(以下「金氏大法」)』、『靈寶領教濟度金書(以下「濟度金書」)』中の「玄都大獻玉山淨供儀」、という三つの黄籙齋のための儀礼書に記述された普渡儀礼を取り上げ<sup>14</sup>、召魂、疾病の治療、沐浴、施食、施食後の説教の五つの段階に分けて、それぞれの記述を比較しその特色を指摘した。これらの儀礼書に記された黄籙齋では、本来救済の対象となる死

者の靈魂の救済のために行われる一連の儀礼が、ほとんどそのままの形で、ただ救済の対象を孤魂として再構成され、繰り返されることを明らかにした。しかしあまりに論文が長文になることと、明清時代以後はあまり見られなくなることなどの理由により、鍊度以降の儀礼については考察からはずしていた。また「中元節の成立について」においては<sup>15</sup>、道教の普渡儀礼が宋代に成立した道教独自の葬送儀礼とともに形成され、さらに仏教の施餓鬼儀礼が普渡儀礼として行われるようになる過程を考察した。この仏教の施餓鬼儀礼が、道教の普渡や葬送の儀礼が成立するにあたって、大きな影響をもたらしたであろうことはすでに指摘されている<sup>16</sup>。

宋から元にかけての時代に編纂された多くの儀礼書の中でも、「立成儀」を分析の中心にすえたのは、この成立が比較的早いと考えられることと、「立成儀」の記述は儀礼の過程が比較的把握しやすいようになっていることが主な理由である。そこでまず「立成儀」の成立について、現在までに明確になっていることを紹介しておきたい。

「立成儀」は、巻頭に見える著者表示によれば「留用光傳授、蔣叔輿編次」とされている。まず伝授者とされる留用光は、龍虎山で正一の儀礼や玉府五雷法を学び、天心法にも通じていたという。彼は孝宗に呼び出されて杭州に赴き、雨を祈って靈験があったため、1203年に左右街道録に任ぜられている。そして江浙の地で黄籙齋を行い、黄籙科儀を編集したという<sup>17</sup>。この書物の編者である蔣叔輿は、一方で弋陽縣の知縣を勤めた官僚であったが、師匠である留用光には1195年に括蒼で初めて出会い、さらに1199年と1202年の二回にわたって龍虎山を訪ねて会っている。その二度目の時に荆・蜀の方士より授かった法を蔣叔輿に授けた。蔣叔輿は「その変通に通曉してこれらの法を施行したが、試験的に行うごとに靈験があった。危急のときに懇請すると拒むことはなかった。怪事を去り危機を救済するにあたっては、直ちに靈験があった」という。そして留用光は彼に田居実が伝えた齋法は欠けたところがあるので、不備な部分を補うように勧めた。以後彼は閲覧した秘書を編集し、誤り異同を訂正して、『黄籙齋儀』36巻、『自然齋儀』15巻、『度人修齋行香誦經儀』24巻を編纂し、これらをまとめて『靈宝玉檢』と呼んだ。巻57「附録修書本末」によれば嘉定16(1223)年に成ったという<sup>18</sup>。ラガウェイ教授によれば、現行のものはこの『黄籙齋儀』に巻51-57を付け加えたものではないかという。また教授によれば、蔣叔輿は神霄など新しい伝統を取り入れており、後述の路時中の玉堂大法や天心法などにも言及している。そし

て五訳(Five Translation)へ言及するなど天台の伝統に繋がる部分や、あるいは五府事(The rites of the Five Offices)や九靈飛歩など、『道法会元』の童初大法に見えることに繋がる部分などが存在していることを指摘している<sup>19</sup>。そしてたとえば巻12「開經疏」が、「大明國某布政使司某府州縣居」と始まっていることに見られるように、明代になってからの手が加わっていることは間違いない。蔣叔輿については戴栩が「存齋蔣弋陽墓碑銘」を、また呉泳が「蔣知縣墓碑銘」を残しており、そこには特に道教方面での業績には触れていないが、月椿銭が民の負担になることを主張していたことなど、地方官として人々のために尽くしたことを伝えている。

次に「立成儀」全体の構成を紹介しておく。まず巻1では、ここで記述される黄籙齋など道教の「齋」という儀礼について論じた「序齋」に続いて、三日間の黄籙齋の順序、道士に齋を依頼に行く際に用意すべきものなどを記し、続く巻2では壇や燈の配置、択日のためのデータなどが記され、巻3からは、預告や正奏などの際に神々に上奏される文書や、齋の期間に張り出される文書などの様式が示される。巻16から巻31までは黄籙齋を構成する各儀礼の内容を記述した儀礼書が記載される。ここには道士たちのなすべき行動や、唱えるべき呪文、奏上すべき文章などが示され、時に応じて解説の文章が挿入されている。そして巻32から35までは、各儀礼や呪文などについての解説がなされ、巻36では儀礼の中で用いる讀文、頌文などが紹介され、巻37では各儀礼の順序が記される。巻38では儀礼のときに招かれる神々の名称が列挙され、巻39では旛や燈の図が、そして巻40から44までは各種の符が、巻45では符を使用する時の告文が示される。巻46と47では儀礼の各所で道士が神々に対して奏上すべき文章が載せられている。この巻46以降は巻頭の署名が蔣叔輿だけになっている。巻48では附薦すなわち齋儀の主要な救済対象以外に、彼らと一緒に救済する亡魂のために用いるべき文書が、巻49には儀礼に用いる文書や道士の資格・行動などについて注意すべきことが列挙される。そして巻50には必要な経費があげられている。この部分は改めて分析する必要があると思われる。巻51から56までは、醮に招くべき神々の名が列挙されている。これらのうち、この論文で取り上げる普渡については、巻29「上清五府撰召幽魂全形昇度還神復性儀」から始まり、巻31「靈宝普度大齋伝符授戒儀」で終了する。

## 1. 召魂

立成儀巻29「上清五府撰召幽魂全形昇度還神復性儀」

の記述によれば、はじめに道士は鬼門に向かって、香炉を置いたテーブルを並べる。

次に道士が「破暗開通道路法」を行う。香を焚いて、まっすぐ立ち、「浄天地呪」を一度唱え、四方に炁<sup>20</sup>を吹く。九鳳破穢真官一人が壇に至るのを存思する<sup>21</sup>。次に「九鳳破穢罡」を踏み、九華真人に変身するのを存思する。しばらくして元始天尊が十方の無極天真大聖・上聖高真を引きつれ、円光の中心に坐すと存思し、九拝して、「元始天尊は真人を監督して生を救う」という意味をもつ密呪を唱える(5b-6a)<sup>22</sup>。

そして次のように宣する。「今齋主は無上黄籙大齋を行って某の靈魂を救済し、傍ら孤魂滞魄を救済しようとしています。特に道旨を頒下して、陽光を照らし、道路を開通して、玄壇に(亡魂たちを)到らせてくださいますように」(6a-b)。

そして「開通道路符」を執り、「三界・神界・地府などに普く告げ、先祖や前世の関係者たちを罪簿から除き、悪根を滅して、拘留を解き、元始符命によって、昇仙できますように」(6b-7a)という意味の呪文を密かに唱える。この呪文は三回唱え、唱えるときには、天門の炁を一口取って符の上に吹く。手印を結び、符を鬼門上で焼く。そして「孤魂たちが鍊度を受けて、長生を獲得し、三途の苦難から解放されて、三界を超越し、上清の境界に逍遥できるように」(7a)という呪文を唱える。

次に高功は上香し、可韓府・独隸府・興生府・功都府・聚魂府・司命司録・司功司殺一切神君に対し、これから鍊度を行うので、孤魂が妨げられることなく、壇に到れるように願う。そして南斗火鈴大將軍を召して、火鈴によって諸方を照らし<sup>23</sup>、改めて諸方に通ずるように告げる(7b)。「太一飛符」(巻4)を焼き、「苦界に沈む孤魂たちを、壇に導いてくれるように」と告げる(7b-9a)。そして「普召牒」を宣し、「召魂大將軍符」(巻42)を焼いて密呪を唱え、亡魂を壇に導く将吏たちを召す(9a-b)。この「普召牒」は「立成儀」の巻13に掲載されているが、この文書の目的は、この齋が行われる壇を守護する神々、すなわちこの歳に当たっている干支の神々や当所の城隍神・土地神等に対し、六道・四生の衆や孤魂およびその眷属たちをすべて齋壇に導き、彼らが救済を得られるように護衛し、齋壇の生気が侵されることがないように請うことにある(巻13・19a-21b)。道士は籙を執って亡魂を招き、「迴黄章」を唱える。その内容は「地獄にいる亡魂を籙によって招く」という意である。

地獄から壇へと亡魂を招請するにあたり、それぞれの組織に所属する神々の役割に応じた命令を下していることが特徴である。

## 2. 疾病の治療

儀礼書では特に区別されているわけではないが、次の呪文からは、招きよせた亡魂の病を治療し、肉体・精神の健康を回復させる段階に入る。死者はすでに身体を失っているが、道教の死者儀礼の目的は、死者が永世の身体を得て、仙界に登ることができるようにすることであり、そのためにも疾病を治療しておくことは不可欠の過程と考えられている。この過程は現在行われている死者儀礼においても見ることができる。

最初に「天地の正真の炁によって、再び彼らの肉体・精神を集める」という内容の呪文を唱える<sup>24</sup>(10a)。次に「地府は亡魂を隠すことなく、みな解放するように」という呪文(10a-b)を、そして三番目に「苦悩を経ることなく、身体が光明を帯び、再び元の肉体・精神を回復するように」という意が表現されている呪文を唱える(10b)。「身体が光明を帯びる」というのは、仙人の身体になるということの意味なのであろう。二番目の呪文を唱えるときには、道士は東北の炁を取って籙に吹き、億万の死者の魂が壇の下に集まっていると存思する。そして改めて様々な孤魂たちが壇に赴き、疾病を癒して、救済が得られるようにという祈願文を宣する(10b-11a)。

次に上香して、「青帝護魂君・白帝侍魂君・朱陵火府真君」等に、真炁を降して男女の靈魂たちの病苦を治し、肉体・精神とも完全さを回復するように請う(11b)。そして「広度沈淪天尊」の号を唱え、高功は以上の官吏たちが下降し、左右前後に羅列して護衛することを存思し、「元始天尊が天医の神々に勅して、朽ちた骨を完全なものとし、普く天・人を救済するように」という呪文を唱える(11b-12a)。

次に「五帝真諱呪」を黙念し<sup>25</sup>、五嶽の炁を取って吹く。「治病功曹符」を執って、「四生六道、十類の有情などが苦しんでいる病傷は、天光によって治療し整えることができる」と唱える(12a)。ここで祖炁を取って符の上に吹き、符を焼く。そして「度魂真諱呪」を黙念し<sup>26</sup>、三塗五嶽<sup>27</sup>の炁を取って亡魂の上に吹く。この「五帝真諱呪」と「度魂真諱呪」とは繰り返しセットで登場する。高功は座に就き「死者たちは本初の姿に立ち返り、精神・肉体ともに澄んで輝くものになるように」宣する(12a-b)。

次に高功は「大洞十八玉符」を執って<sup>28</sup>、腦神泥丸赤文混洞嘘君、左目神通光玄真君等、腦・左目・右目・舌・心・肝・脾・肺・腎・陰・胞・胎・結・節・血・精・炁・神・命の十八の神々を召請し、彼らに直ちに降

臨して、亡魂のために炁によって身体が形成され、神・性が回復するように願う。高功は祖炁を取り符の上に吹いて、符文を宣した後、符を焼き、「梵炁普生天尊」の号を唱える(12b-13a)。「召五神混合符」を執り、身体各部分に対応する正真の生炁が直ちに降臨して、亡魂の身中に流れ入るようにと宣する。そして祖炁を取って、符の上に吹き、符を焼き、「妙化無辺天尊」の号を唱える(13a-14a)。次に六丁金童・六丁玉女あるいは八万四千毛髮神・三万六千出入神等を召請し、彼らに速やかに降臨して、亡魂の身体各所を守護するように要請する。そして高功は五方の炁を取って、亡魂の中に吹き、「億劫化形天尊」の号を唱える(14a-b)。さらに三魂神と七魄神を召請し、各の三魂・七魄を守護するように要請する。この時高功は三塗五苦印を結び、三塗五苦炁を取り、亡魂の中に吹き、「超真解脱天尊」の号を唱える(14b-15a)。そして新たな質(肉体)・神(精神)が形成され、真炁が備わり、鍊養の過程を経て仙界に上昇し、長生を得るという内容の「玉清生魂育魄保神内呪」を唱える(15a)。次に「金容出世天尊」の号を唱え、水を撒いて万億の亡魂が、端正な容顔で、みな壇下に集合し、救度を待つと存思する(15b)。再び「今魂魄を生育して、本性を回復し、形態が不具な者は完全となり、病苦が癒えない者は癒える」と宣し、「靈源普潤天尊」の号を唱える(15b)。苦の根が消え、真性が明らかとなったので、次に沐浴して業障を除くことを宣言する(16a)。

すなわちここでは身体各器官に対応する神々を招請し、彼らがその生炁を降臨させることで、完全な身体および魂魄を再生させて仙人となる準備を整えている。

### 3. 沐浴

次に招きよせた亡魂の沐浴を行う。この儀礼については巻29「靈宝普度大齋沐浴幽魂儀」に規定されている。はじめに二つの浴室を準備し、浴盆の中に香水を蓄え、「洞明丹陽沐浴鍊度符」(巻43「黄炁陽精洞明丹陽鍊度靈符」にあたるのか)を入れる。

この水を加持するために、高功は次のように五老上帝・三十二天帝等に上奏する。「六道四生、孤魂滞魄を普く救済するために、法水を加持し、衆魂に沐浴させる。願わくは慈悲を賜って、正真の炁を降し、香湯の中に注ぎ、熱悩の憂いを除き、清浄の果実を超克できるように」。そして高功は以下のように存思する。「日・月、赤光・黄精の二本の光、五色の雲炁が互相に照り映えて部屋に満ち、三十二天や日・月・五星の炁が、水中で互いに交叉する」(16a-b)。

道士たちは「天河は東井に灌ぎ、石景は水母の精」と始まる「東井頌」を唱え(16b-17a)。以後は順次五つの文章と五つの呪文を唱えていく。

はじめに「前世では真実を見失い、終に苦海に漂流した。今日救済を受け、華池に沐浴することができた。もし好い因縁に依ることができなければ、浄境に超え出することはできない。あなた方が天界に往生するのを助けるために、「三元品戒沐浴蕩穢呪」を唱える」と宣し、続いて「天の炁・日月の輝きが、亡魂の身心の穢れを洗い清め、罪過を消滅させて、天界に昇るように」という内容の呪文を唱える(17a-b)。下線の部分は、呪文の名前のみ変えて、続く四つの呪文を唱える際にも繰り返される。

次に「陰穢を洗い除き、常に清浄な行いを保つ」ように述べて、「九つの孔は清らかで、五臓六腑には神が宿る。三丹田は堅固で炁が充満し、命を新たに生に返り、鍊度を受け、天地と同じ寿命を得て、仙界に遊ぶことができる」という意の「金房度命呪」を唱える(17b)。また「悪根を絶って、道炁を保つ」ように述べて、「緑字迴年内真呪」(「天地は清らかさを同じくして、穢れた塵を洗い除く。鍊化すること九回で、形を太真に返す。百関は靈を納め、節々は新しくなる。」)を唱える(17b-18a)。さらに「積み重なった恨みや過ちを消し、迷いや欲に染まらない」ように述べて、「澡鍊超昇呪」(「天は朗らかで気は清らか、あなたの身は已に精である。穢れた塵は消除され、九つの孔は靈を受ける。あなたを変易させて、童子の姿に返らせる。幽魂は超度され、みな飛昇することができる」)を唱える(18a-b)。そして「真なる世界に上り苦を離れるために、身なりを整える」ことを述べ、「三元品戒冠帯呪」(「五濁は已に清く、八景は已に明らかである。今日道を受け、罪は減し福が生じる。長く五帝とともに、真の上靈と斉しくなる」)を念ずる(18b)。以上の呪文のうち、「三元品戒沐浴蕩穢呪」と「三元品誠冠帯呪」の二つの呪は、『太上大道三元品誠謝罪上法』に、沐浴に際して唱える呪と、冠帯を着け衣服を着るときに唱える呪として挙げられている。また後者は、巻27「上清南宮水火治鍊度命儀」において、水鍊を行うときにも宣せられる。この後、「化衣」すなわち衣服を焼いて亡魂に送ることを行い、「天河灌沐天尊」の号を唱える(18b)。

すなわちここでは亡魂たちに沐浴させ、五つの呪文を唱えることで、身体を清めるばかりでなく、過去の罪過を洗い流し、さらに鍊度を受けて真人の世界に生まれ変わるための準備がなされる。これは「疾病の治療」の段階と共通している。

## 4. 施食

立成儀卷30「靈宝普度大斎加持斛食儀」は、いわゆる施食の儀礼について述べている。現在見られる道教の普渡では、中心となっている部分である。以下の施食、鍊度、伝符・授戒の三つの部分については比較的長文にわたるので、いくつかの段落に分けて説明し、それぞれの意味について最後に考察することにした。

### 4.1 神々の招請

はじめに高功は、浴室から亡魂たちを菱郭（普渡の供物を並べるために設けられた場所）に導き、そこで道士たちは「光明頌」（卷36）を唱え、次に普渡の会場である斛筵所に赴き整列する（1a）。菱郭は周りを囲まれた一角を指し、その中に供物を備えた斛筵所が存在しているという形である（巻2・11b）。そこで高功は香を焚き、無極大道・三境帝師・至尊經宝・諸天上聖・三界真宰・十郷威靈を供養し、彼らに道壇に來臨してくれるように請う（1a-b）。次に高功は「普く無辺の聖たちに献じ、香煙は十方に散ずる。願わくは・・・天人の衆を運らせて（亡魂を）救済し、みな法橋に上ることができるように・・・」という「普献頌」を唱え、上香して次のような内容の存思を行う。「自らは変身して救苦天尊となり、道士たちは救苦真人に変身し、供物を供えた所は三層の宝台となる。供物中の紅紫色の光炁が上は天の際まで達し、監臨将吏・里社神司は四方を守衛する」（1b-2a）。

### 4.2 亡魂の招請

そして以下の内容を上啓する。「私の聞いているのに、六道四生の輪廻は、たいへんに超脱し難く、多くの魂魄は、因果応報の循環から逃れる機会がない・・・ひとたび苦界に沈めば、長い間陽光から隔離される・・・天尊は哀しみ憐れんで、普渡の方法を設け、彼らを救済する」。そして「六道四生、一切孤魂は法壇に來たつて、法食を享受し、説経を聴いて、みなよく天界に登るように」と説く（2a-3b）。

### 4.3 功德の証盟の要請

続いて「甘露の供え物は、その法味は思議し難い・・・この法食の施しを受け、天に生じて紫微に登る。悲いかな長夜の苦、三途の中に熱惱する。猛火は咽喉に入り、長く飢渴の念を生ずる。ひとたび甘露の雨を洒けば、熱は清涼を得たようだ。神魂は大羅（天）に生じ、潤いは一切に及ぶ」という呪文を唱えるが（3b-4a）、この後半

の部分（「悲いかな長夜の苦」以降）は、現在行われている普渡の中でもしばしば見られる。次に「自然の天厨の食は、その法味は思議し難い。六道中の鬼神で未だ救われない者は、ことごとく甘露の味に霑い、皆な飽満を得て。天に生じて紫微に登り、清都宮に上昇する」という意の呪文を唱え、高功は次のように存思する。「天門から金光の道炁が、連綿として降下し、供えた食物・水盂の中に注ぎ、太上三尊・青玄上帝・十方衆聖が空中にあって、彼らのために証盟（証を立てる）する」（4a）。以上の二つの呪文は正薦の儀礼には登場しない。

### 4.4 三皈依

次に道宝・經宝・師宝に向かい、亡魂たちに得度を受けさせ、三宝に帰依する。たとえば道宝に向かっては、はじめに高功が「道は測ることができず、天帝の現れる前から存在し、恍惚として明らかにし難い。思うに大道に対する尊崇は、衆生の頼みとするところとなっている。今浄供を並べ、道教の儀式を行う。請い願わくは道宝は慈悲を垂れ、亡魂に得度を受けさせるように。謹んで心からお願いいたします」と唱え、知職道士がみな「諸の衆生が、みな無為の果を証することができますようにお願いいたします」と唱える（4a-b）。

### 4.5 救苦天尊の宝号と『救苦経』

次に高功は太一救苦天尊に対して、特別に壇に來臨して、三塗・六道の亡魂が天尊の名前を聞き、經典を聞いて、仙界に登れるように願う。そして「太一救苦天尊」の号を四回唱え、『救苦経』を一回読み上げて、高功は以下のように存思する。「五色の光明が東方に出現し、月のような円形を成して、天上・地下を普く照らす。十方世界はすべて明亮で、青玄上帝（救苦天尊）は九色九頭の獅子の上に坐し、金翠蓮花の座に在る、獅子は口中から火焰を吐き出す、天尊は火焰の中にあり、頭頂から微細な白光が放出され、それは千万の鋭い剣に似ている。それは供えた食物に注がれる」（6a-7a）。そして三十二天帝君に、ここで普渡の斛筵を設けるので、天の光・炁を降し沈魂たちを救済してくれるように申し上げる（7a-b）。

### 4.6 変食

続いて「靈書中篇」を一回読み上げるが<sup>29</sup>、この時に高功は三塗五嶽印を結び、次のように存思する。「道士それぞれが（救苦）真人となり、諸天帝君と一緒に、声をそろえて（靈書中篇を）読み上げる。四方の炁は供えた食物・水盂の中に注がれる」。再び「靈書中篇」を一

回読み上げ、「黄炁十二本が東方から来て、日・月・五星の光が上方三十二天の炁を引導して、相互に照り映え、供えた食物に注がれる」と存思する。再び「靈書中篇」を三回読む。そして「四方の紅光が、壇を囲んで五色の紅霓となり、高功の身体中の五臓の間に降下し、一大円光となる、広く覆って虚空に遍満する、高功の身体は日宮に在るようで、供えた食物は一から二を生じ、二から三を生じ、三から九を生じるというように段々と増大してきて無窮無量にまで到り、十方に遍く満ちる」と存思する(7b-8b)。「変食符」を水盆中に沈め入れ、「功德の光が冥界の扉を開き、真香が流れ蓮の天蓋が浮かぶ中、真人たちが樓にあって靈宝の教えを述べ、亡魂は自在に天堂に遊ぶ」という意の「甘露通真呪」を三回唱える。高功は水盃を捧げ、巡回しながら柏の枝で食物に水を撒いていく。この時には、青玄上帝(太一救苦天尊)・真人・官君らがみな甘露真言を唱えて、その甘露を撒き、香炁は馥郁として、十分に遍満する」と存思する(8b)。

#### 4.7 破獄

「果てしない酈都の中に重なる金剛山、靈宝の無量の光が、炎の池の煩いを明るく照らす。七祖にわたる祖霊たちは、香雲の駕籠に随い、青蓮の上で智慧を定め、上生して精神は永に安らかである」という意の「破酈都地獄開業道呪」を三回唱え、高功は次のように存思する。「東北方の酈都九幽地獄等にいる罪魂が、種種の苦刑を受けているが、泥丸中の玉清上帝が宝座にあり、真人・官吏とともに一緒に『破酈都地獄開業道呪』を唱える。上帝は九色の慶雲紫炁を吐き出し、金光によって地獄の鉄城を破り、枷鎖を打ち砕く、地獄を改変して清浄境とする、罪魂は出て来ることができて壇下に到る」(8b-9b)。

#### 4.8 説教

その後、亡魂たちに対し次のような説教を行い、彼らを導いて法食を享受させる。「上に加持をした法食は、無量の勝因(善いことをした因)があり、幽魂に薦めれば、福境に昇薦できる。あなたは昔大患を蒙り、この身をもつことになった。身には飢虚があり、食を思う。しかし身は今どこにあるというのだ。なぜ食のためにする必要があるか。・・・六塵は幻で、様々に空に帰する。現前の衆霊も、色身はすでに滅したのに、なお愛樂の念は未だ断たれないだけだ。あなたはよく空を解し、性を見ることができれば、妄を絶って真に帰し、有無に執着せず、自然に超脱する、もし塵根が断たれず、

業の想いが除かれず、現に飢渴を苦とする者は、私の無碍の甘露法食を饗けなさい」。そして「十方救苦天尊」の号を唱える(9b-10a)。法食の加持に関わる立成儀のこの部分の記述はたいへんに詳細である。

#### 4.9 宣告文と呪文

「立成儀」の記述では、実際の施食の部分は巻30「靈寶普度大齋施斛宣演法語儀」の中に見える。高功は上香して座に就き(座は鬼門を望んで設けられる)、十方無極世界の一切天人・一切飛空大力鬼神・一切地獄苦魂・一切畜生業累・一切無主孤魂等に向かい、以下のような内容を告げる。「あなた方はまだ執着から解放されていないので、現在法会を準備し、妙淨の供食を提供して、飢餓を感じて苦しむあなた方の身体を救済する」(10a-b)。道士は「玉清慧命啓請法言」を唱え、高功は上帝訣を結ぶ。その内容は「天尊の慈悲・功德を称賛して、稽首・皈命し、長生・成仙を祈願する」というものであり、「呪食儀」における「玉清慧命啓請呪」と同様である(10b-11a)。

続いて次のように宣告する「雲厨の妙膳を食べることができ、紫府の靈文を聞くことができ、あなた方は道を得て神仙に成ることができ、すでに人の身体を獲得し、現在は法食を心行くまで食べるように。あなた方が仙界に往生するように」。そして「天界を仰ぎ靈光に手を合わせ、魂魄を制し思いを定める。法食を食し、鍊度を受けて天界に遊ぶ。この世の様々な区別は存在していないことを知り、教えを忘れて流れに応じる境地に至る」という意の「玉清甘露加持法食呪」を唱える(11a-12a)。このように、はじめに主旨を宣告した後、呪文を唱えていく。全部で六つの文を宣告し、六つの呪文を唱える。

次に「金声・玉冊は救済のための教義と儀式を人々に降した、智慧の力によって迷路から出離するように」と宣し、「法炁から生じた日月星の三光は明らかに輝き、宝である気は三つの丹田に満ちる。神々が会し万神が備わって、身体は寿命が日月と同じになる」という意の「三光法炁呪」を唱える(12a)。

「玉醴を飲み、靈芽を食べ、身体の九箇の竅はすでに開通した、百箇の関もよく保養する必要がある」と宣し、「一炁が陰陽に分かれ、三光に凝化する。様々な創造物の中で理は存在している。黄泉も天界も忘れ、清淨の境地に至る」という意の「三光流精呪」を唱える(12a-b)。

「教理と智慧により三塗五苦の苦惱を除いた、真理によって罪を消した」と宣し、「(亡魂が生まれ変わった)

新生児が生じ、三光が明らかに輝く。それらを受けて炁が行き渡り、神が備わり、身体をもったままで太虚に昇る」という意の「三光沢嬰呪」を唱える(12b-13a)。

「元始天尊は世界を創造し、真文が出現した、救苦天尊は亡魂を導くために、神妙なる科儀を流通させた、あなた方は久しく苦悩の境遇に墮落しており、正しい道を聴くことがなかった、甘露と法言とによって業障を破り除き、本来の本性を回復すべきである」と宣し、「新生児は三魂七魄が備わり、五神・三台が祝福する。空に昇るのに左右に無英・白元(身体の神)を備え、前後に朱雀・玄武が衛り、上に翠蓋・下に金蓮があって、香雲・甘露は尽きることがない」という意の「玉清陰生梵唱呪」を唱える(13a-b)。

「これまで述べてきたのは、靈妙で重要な教えであり契りである。声は十極に及び、恩は三界に行き渡る。道炁・恩光は呪・符に従って下降し法食に注がれる。法食を享受した亡魂は、障業が永く消え、五臓は元気になり、百関は保養され、寿命は無尽となり、形は太虚と同じで、功德は深く重く思い量ることができない。各位は大慈悲心を発してみな一緒に潤った。あなた方の身心は清涼・飽満・安泰で輪廻を解脱した。施しをする者も受ける者も、同じように道恩を受け、福果を得られる」と宣し、「破地獄離苦升天神呪(功德は不思議であり、行う者には福報が生じる。法の飲食を施与して、永く安楽の処に生ずる)」を唱える。そして亡魂への説教を行う(14a-b)。

以上ここでは施食の部分につき、九の段落に分けて紹介・考察を行ってきたが、最後に全体の構成を振り返ってみたい。まず始めに4.1では関係の神々を招いている。道教関係の多くの儀礼では始めに請神を行うが、この部分にあたと考えられる。4.2では施食の目的が宣言され、亡魂たちを召請している。4.3では甘露の食によって亡魂たちに救済をもたらすことが再び明言され、招かれた神々に功德の証盟を依頼している。4.4では亡魂たちが三宝に帰依するが、現在の普渡でも必ず見られる部分である。4.5では亡魂に救苦天尊の宝号と經典(『救苦経』)を聞かせる。4.6では「靈書中篇」の読誦により、炁が降って食事を無量の法食に変化させる。4.7は破獄の呪文を唱える。破獄は地獄の暗幽を照破することで、亡魂を地獄から解放する儀礼であり、別に行われるが、ここではこれを繰り返していると考えられる。4.8は亡魂たちへの説教であり、法食を食することによってこの世への執着を絶ち、真理に目覚めるようにとの教えはかなり仏教の影響が強いといえる。4.9は仙界への上昇を目的として唱える、六つの宣告文と呪文か

らなる。

## 5. 説教

施食の後、亡魂たちに道教の教理を説き聞かせる。はじめに教理を説く意味について、「あなた方のために真実の道理を説き聞かせる。道理を学ぶことによって、それを仙界にいたる橋とすることができる」と述べる(14b)。

次に宇宙の形成過程について述べる。ここでは「はじめに三炁が生じ、それが凝結して三天となり、三が九となり、九がまた三を生じて、三十六天がこれによって分かれ列した・・・」という道教流の宇宙生成説が説かれる(14b)。

そして次のような説教が続く。「人は宇宙の中に生まれ、天地と気・理を分け合っている。気に集散があるように、人にも生死がある(14b-15a)。しかし長生不死にいたる真実の方法があり、人には優劣があるので、修行にも精粗があるが、少しずつ修行を重ねれば、次第に道の真実に近づき、聖仙となり、窮極の果を得ることができる(15a)。一切の衆生は迷いに沈み、三界に輪廻して、五道を流転し、たとえ天人に生まれたとしても、必ず終わりがある(15a-b)。もしあなた方が三清の快樂を希求し、煩惱を断って、無為の境地に入ろうとするなら、それは大なる邪見である(15b-16a)。それは愚人が大地を恐れて逃げようとしても、大地を離れることができないのと同じようなものである。たとえ生死のある身体を恐れて三界を捨てようとしても、身体は生死を離れることはできない。衆生は無明の中にあって、真の道は身体にあるのに、見ることはできない。愚人が東奔西走し空と色とを求めても、色は即ち空であることを知ることができないようなものだ。一切の世間は同様で、心が生じて奔走し、道の真を求めようとしても、身心がすなわち真の道であることを知らない(16a)。三清は煩惱を離れず、大道は別のところにあるのではなく、身心がすなわち真の道なのだ(16a-b)」。

最後にこの儀礼の目的が述べられる。「今道教の儀軌によって、六道に沈淪する亡魂のために、普く施食を設け、あなた方が帰依の心を起こし、輪廻を解脱する道をたどれるように祈願する。特にあなた方の三業が解き除かれることがないのを考慮して、続いて鍊度・授戒を行う」(16b)。

## 6. 鍊度

続いて亡魂の鍊度を行う。鍊度は立成儀卷31「上清南宮鍊度幽魂儀」に説かれているが、これまでの過程と同様、正薦の亡魂のための卷27「上清南宮水火治鍊度命儀」に対応する。

### 6.1 鍊池の準備

まず方形の器を用意して壇の西北方に安置し、札に「南宮太陰水鍊池」と書く。また円形の器を東南方に安置して、札に「南宮太陽火鍊池」と書く。器に入れた黄華神水と柳の木で作った炭火を準備し壇の下に置く。鍊度の時になって、法師は叩齒・存神（神々が存在するのを瞑想し）・黙朝（神々に朝謁する）して、太上の真水・真火を降すことを乞い、それらが鍊度の場所に下降することを存思し、三拝・三捻香する（1a）。

そして北極紫微大帝・南極長生大帝に対し、「自分が齋主誰そのために黄籙大齋を挙行し、今六道四生・孤魂滞魄のために施食を行い、鍊度を挙行しようとしている。願わくは恩沢を受け、（彼らが）苦を離れて超昇し、天の慈尊を望むことができるように、特に南北水火二司・五嶽総鎮真君に命を下し、陰陽の靈根、真水・真火を降すとともに、今日壇場に降下して衆靈を鍊度し、彼らが天府に昇れるように」との願いを述べる（1a-2a）。高功は元始上帝が泥丸宮中において、自らは九華真人となり、諸司仙曹将吏が服装を厳かに整え、光り輝いて下降すると存思する（2a）。

### 6.2 火鍊池の調整

まず高功は火池法を行う。「南斗火鈴罡」を踏んで火池に至り、道士は「（大梵）隠語（『靈書中篇』に同じ）」を唱える。師は火池の周囲に設けられた関連の神々十二人の牌位に至り、「浄天地呪」を一度念じ、水を一口池に吹いて、「建火池呪」を念ずる。朱陵の烈火流金<sup>30</sup>が火池の東南の方角から流入し、炎々として金碧の炎を發する。午炁を三口取り<sup>31</sup>、池の中へ吹く（2a-b）。

高功は「真火合同符」を執って、手に「降真火訣」を結び、寅の位置を押さえてから午に至る<sup>32</sup>。そして「真火が速く下るように」という意の呪文を黙念し、午炁を取って符に吹きつけ、符を火池中で焼く。そして「流火によって身体を変容させ、福堂に昇らせる」という意味の密呪を唱える。再び東に面してその日の太陽の炁を取って吹きつける（2b）。

次に掌火池使者・鍊度官童将吏・日中陽精を指揮して、速く池の中に降りて伺候して、幽魂等を引率して火

池に入れさせ、法によって身体を治鍊させる準備を行う。高功は「流火の神庭は、広さは無辺で、上に朱陵府があり、樓閣は森然としている。庭中の火は金碧色で、炎の末にはみな金の鈴があり、騰騰として上がっていく」と存思する（3a）。

### 6.3 水鍊池の調整

高功は水池法を行う。「北斗玄枢罡」を踏んで水池に至り、道士たちは「（大梵）隠語」を唱える。高功は水池の周りの十二の神位に至り、「浄天地呪」を一度黙念し、一口水を池の中に吹いて、「太上は勅を發して、亡魂の罪を許し、亡魂はみな光明を見て、救済を得る。水池を建て、次第に上昇してみな超生を得る」という意の「建水池呪」を唱える。そして天河東井（『史記』天官書では「東井（二十八宿の一つ井星）は水の事を司る」とある）の水が水池の西北角から流入し、湛然として清く澄むと存思し、西北の炁を一口取って池の中に吹く（3a-b）。

高功は「真水合同符」を執って、「降真水訣」を結び、申を押さえて子に至る。「天真の玉液・靈根たる真水が、速く枢府に降るように」という意味の黙呪を唱えて、北炁を取って符に吹きつけ、水池中に沈める。また「東井の華（真水）を運んで幽魂を洗い、玉女が津液を神に注いで、魂神は澄み、道炁が長存する」という意味の密呪を唱えて、再び西に面し、当日の太陰の真炁を取ってこれに吹きつける（3b-4a）。

そして掌水池使者・蕩形官童将吏・月中黄華靈根を指揮して、速く池の中に降りて伺候し、幽魂等を引率して水池に入れさせ、法によって形質を洗い清める準備を行う。高功は天河・東井は広さが無辺で、その水は清浄で光り輝き、上に天府があって、樓閣は森然としていると存思する（4a）。

### 6.4 神々の招請

次に道士たちは鍊度所に行く。高功は座に詣り、上香する。次に「存変如儀」とあるが、その内容は不明である。「生に返す靈妙な作用を持った香の飛烟は篆文に結集する。諸天・諸地の気は盛んで遍く満ちる。その気に委ねて功を聚め、幽魂は鍊を受ける。一切の含生は、俱に道岸に登る」という呪文を唱え、三清三境・十極十華・太乙救苦天尊・長生大帝・三省五府真宰・朱陵火府・南昌上宮・靈宝鍊度合会聖真仙衆などの神々に奏上し、しばらく天界をでて壇に赴き、法雨慈雲が冥界におよび、私たちが遍く亡魂を救済することを得させてくれるように願う（4b）。高功は「天門の祥烟・瑞炁・雲の

彩りが光輝き、三宝慈尊・青玄上帝・諸天大聖・一切仙霊が、輝きながら下降してくる」という存思を行い、「多くの諸天・真人が降臨し、三界が共に会し、地司は幽明を普く救済する。部衛主者は亡魂を壇に導き、身を整えて鍊度を受け、結果を得るように」という「引魂呪」を宣する。そして億万にものぼる救済すべき亡魂が、ともに壇下にいると存思する (5a)。

## 6.5 亡魂の召請

さらに靈宝大法赫奕仙曹・靈官功曹・金童玉女・鍊度仙吏など鍊度関係の神々、泰山五道社令・城隍土地など冥界の神々を召請し、十方の六道四生・有主無主の一切孤滞幽囚苦魂すなわち孤魂たちを、みな靈壇に赴かせ、鍊度を受けさせるように願う。そしてそれらの官吏たちが、威儀を整えて左右に羅列し、鍊度を受ける亡魂たちが、みな壇下にいることを存思し、「三界通化天尊」の号を唱える (5a-6a)。

## 6.6 火鍊

次にまず火鍊を行う。「真火合同符」を執り、「関係の神々と鍊度を受ける亡魂たちを壇に招く役割をもった使者を召請する」という意図をもった「降真火呪」を宣し、左手で午文を押さえる。そして午炁を取って符に吹きつけて、火池中に焚し、火池を建てた際に念じた密呪を唱え、当日の太陽の炁を取り、これを吹きつける。鍊度真人・九光童子・火鈴靈童・鍊度司仙たちに、亡魂を連れて火池に赴き、鍊度を受けさせるように願い、高功は初めのように変神する。そして「火鍊丹界天尊」の号を唱える (6a-b)。

高功は「火府隱文」(巻42)を執り、「南方の君、赤帝の精。熒惑使者、丙丁將軍。朱雀炎神は、赫赫たる陽精(ここまで南方の火に関わる神々)。五行は造化を行い、万物が発生する。天帝は勅を発し、使者は須く聴くように。亡魂を撰召し、真形へと鍊度する。急急如長生大帝勅」という「火鍊大呪」を宣し、「風火訣」という手印を結ぶ。離炁(同じく南方の炁)を符に吹きかけ、火池の中で符を焚する(6b-7a)。「火鍊符」を執り、主火大將軍趙仲明・掌火池使者に、速く真火を降して、亡魂を鍊度するように告げる。南方の火炁を三口取り、自分の火炁を三すじ運んで、相交えて符に吹き入れて火池中に焚し、「玉眸鍊質天尊」の号を唱える(7a)。

「十二炁化生符」を執り、「謹んで長生大帝君・運陽化陰大將軍楊元光・混景大將軍丁忠、……らを召す。従官將吏は飛行・変化するように。何とぞ幽魂のために、腎水少陰の炁・心火少陰の炁……を治め降し、科

に依って鍊度し、氣に委ねて形を聚めて下さいますように」と宣する(7b)。すなわちここでは腎炁・心炁によって腎臓・心臓を再び形成するというのである。引用では腎・心のみを紹介したが、省略した文章では、肝・肺・脾・膀胱・小腸・膽腑・大腸・胃腑・三焦・心胞絡が続いていく。黄籙齋の主要な救済の対象となる亡魂(正薦)のための儀礼を記した、巻27「上清南宮水火冶鍊度命儀」では、十二の臓腑それぞれについて同じ儀礼を十二回行うことになっている。そして祖炁を取り、符文を宣しおわって池中に焚化し、再び炁を取って救済する亡魂たちに吹き、「靈宝符命によって幽魂を鍊度し、五臓六腑・胞絡根元に、華精が遍く行き渡り、丹田に懸け注ぐ。……三景(三光)は洞徹し、万神は齊しく仙人となる。……千・万(の亡魂)は和合して、三天に上登する。急急如長生大帝勅」と宣する。そして「太清靈變天尊」の号を唱える。この「十二炁化生符」によって、仙人の臓腑が再び生じたということを表現しているであろう(8a)。

次に「五帝玉司真炁符」を執り、「上帝の勅に準じて謹んで青帝直符区更生・赤帝直符祝昌中……を召す。なにとぞ幽魂のために安宝華林青芽の炁・梵宝昌陽朱丹の炁……を降し、科によって鍊度し、質を鍊して仙人に変化させて下さいますように」と唱える。五帝の秘密の諱を誦し、五方の炁を取って符に吹き、火池中で焚し、五回齒を叩く。この部分は巻27と対応している。上帝の命令を五帝の使者に下し、五方の真炁を降して亡魂に注ぎ、新たな身体を生じさせるのである。そして「身体各部の神々を統括する中央の炁が生じて尊い働きをする。各部は通じあって長く存し、神々は働きを保つ。丹薬を養育して、長生の神仙となる。大帝とともに、九天に飛昇することを得る。急急如長生大帝勅」という呪文を唱え、五方の炁を取って、亡魂たちに吹きつける。そして「朱陵度命天尊」の号を唱える(8a-b)。

次に「火鍊變仙符」を執り、「火鍊によって身体・魂魄は改まり、陰炁・穢炁は消えて、陽炁は盛んになる。精・神は益々壮健で、九炁(万物の根源という)を合せて道と契る」という意の「丹天火鍊大呪」を誦し、「火鍊成真天尊」の号を唱える。「元君鍊身符」を執り、「炁は化して人と成り、屍は變じて玄に入る。三化・五鍊して、昇って九天に入る。九天の劫にあたっては、さらに魂神を救済する。化を受けて更生し、真人となることを得る」という意の呪文を唱え、五方の炁を取って符に吹きつけ、火池の中で焚し、「度人無量天尊」の号を唱える(9a-b)。次に「合形變形成形大將軍符」を執り、「都召訣」を結び、「謹んで長生大帝君・化靈合形大將軍凌

飛・運靈変形大將軍蔣真・度靈成形大將軍田師文を召す。従官将吏は、飛行・変化せよ。私の真霊を助け、生氣を撰（おさ）め降し、幽魂たちのために形を全うし質を育てて下さい」と唱え、祖炁を符に吹きつけ火池中に焚する。このあたりの手続きも巻27と同様である（9b）。

再び五帝真諱呪を唱えるが、このときには唱える諱の順番が異なっている。五方炁を取り、救済する亡魂に吹きつける。次に度魂真諱呪を唱え、辰・卯・寅の三方の炁を取り、救済する亡魂に吹きつける。次に「靈書中篇」を念じ、四方の炁を取り、救済する亡魂に吹きつける。そして亡魂が火池中を出て、容貌は嬰兒のようであり、身には陽光があり、目前にはっきり姿を現すと存思する。そして「弘濟無辺天尊」の号を唱える（9b-10a）。

## 6.7 水鍊

次に水鍊については、まず「真水合同符」を執り、「降真水呪」を宣する。呪文は「符命を奉じて神々・真人を招くので、招請を聞いたらすぐに威霊を降すように」という内容をもっている。そして坎炁（北方の炁）を取り符に吹きつけ、水池中に焚する。再び密呪を唱えるが、これは水池を建てる際に唱えたものと同じものである。当日の太陰真炁を取り、これに吹きつける。そして「鍊度真人・黄華玉女・東井玉女・鍊度司仙たちを謹んで召す。亡魂を連れて水池に赴き、鍊度を受けさせるように」と宣し、高功は先のように変神する。「清浄度魂天尊」の号を唱える（10a-b）。

次に「洞明丹陽鍊度符」を執り、「丹陽鍊度呪」を宣する。「龍漢蕩蕩、無形無名」から始まるこの呪文は、沐浴の場面でも出てくる。坎炁を符に吹きつけ水池中に沈める（10b-11a）。「水鍊符」を執り、主水大將軍王魁・掌水池使者に、速く真水を降して、亡魂を鍊度するように告げる。北方の水炁を五口取り、自分の腎炁を五道運んで、相交えて水池中に吹き入れる。そして「黄華蕩形天尊」の号を唱え、「飛元聚靈召神符」・「九陽真符」を執り、「謹んで長生大帝君・飛元聚靈召神飛仙使者楊欣之・・・らを召す。従官将吏は、飛行・変化せよ。何とぞ幽魂のために、高上玉清天混溟瑋瑤の炁・泛華紫微の炁・・・を治め降し、科に依って鍊度し、神を鍊して生に返して下さいように」と宣する。ここでは「飛元聚靈召神符」に対応する「飛元聚靈召神飛仙使者楊欣之」・「飛精使者王容」・「飛雲使者張起」・「飛魂使者富公弼」・「飛魄使者丁逢」・「飛光使者陳普」そして「直仙使者時申」・「直真使者黄簡」・「直霊使者路顯」等を召請し、「九陽真符」に対応する「高上玉清天混溟瑋瑤の炁」・「泛華紫微の炁」・「玉婁鳳車の炁」・「中女辟邪の炁」・「太皇

微延の炁」・「化真白灑の炁」・「絳婁子光の炁」・「天真命仙の炁」・「太皇寂玄の炁」を亡魂のために降すように請う。先に見た「五帝玉司真炁符」の呪文の最後は、「科によって鍊度し、質（身体）を鍊して仙人に変化させて下さいますように」となっていたが、ここでは後の句は、「神（精神）を鍊して生に返して下さいように」となっている。祖炁を取って符に吹きつけ、符文を宣しおわって水池中に焚し、再び祖炁を取って救済する亡魂に吹きつける（11b-12a）。そして「乾坤は交わって再びあなたの身体を形成し、臟腑は完全で、結節は絶たれ穢炁は除かれる。鍊度を経て、名が仙界に記される」という呪文を唱え、「好生度命天尊」の号を唱える（12a-b）。

ここで高功は「靈宝九鍊符」を執り、「上帝の敕に準じ、謹んで疾除罪簿司・断地逮役司・・・らを召す。なにとぞ幽魂のために、胞命元第一天元一黄演の炁・胎命元第二天洞冥紫戸の炁・・・を降し、科によって鍊度を行い、命を救済し登真させて下さいますように」と宣する。このあたりは巻27と同じ過程を踏んでおり、『九天生神章経』に基づく九つの炁が降り、胞・胎以下、仙界に上昇するにふさわしい新しい身体が形成されていく過程が表現されている。そして上帝秘諱を黙誦し、祖炁を取って符に吹きつけ水池中に焚し、齒を九回叩き、「鬱单凝霊、禪善保神」から始まる呪文を唱える。この呪文も『九天生神章経』に基づき、呪文の始めの二句は、呪文の「胞命元第一天元一黄演の炁、胎命元第二天洞冥紫戸の炁」の部分に対応している。祖炁を取って符に吹きつけ、「九鍊符文」を宣して水池中に焚し、再び炁を取って救済する亡魂に吹きつけ、「九天称慶天尊」の号を唱える（12b-13b）。

次に「石景水母玉精符」を執り、「東井黄華、石景玉精」から始まる呪文を唱える。この呪文の後半は、「百関・九竅には、元炁が滋り栄え。五臟・六腑には、万神が自ら生ずる。胎胞・結節は、水に随って扉を開く。死炁は断絶し、悪根は沈淪する。私は今鍊化して、死骸に魂を生ずる。故（もと）に反（かえ）して貌を改め、玉の体・金の容（すがた）となる。変化し穢を鍊して、紫庭（天界）に飛昇する」という内容をもっており、やはり新たな身体を獲得して天界に生まれ変わることを表している。そして坎炁を符に吹きつけて、水池中に沈め、「高真妙化天尊」の号を唱える（13b-14a）。「神府鍊身符」を執り、「上天に生まれることができ、さらに霊妙なる教えを受ける。積み重なった穢れは除かれ、屍は生まれ変わる」という意の呪文を唱えて、五方の炁を取り符に吹きつけ、符を水池中に焚し、「金闕化身天尊」の号を唱える（14a）。「金液鍊形符」を執り、「金液鍊形、與道

合真」から始まる呪文を唱える。この呪文の後半は、「紫雲は天に飛し、身は六龍に乗る。水は上に火は下に、三宮（三丹田）に流入する。神は陽明に居り、大道は自から通ずる」というものになっている。そして玄炁を取って符に吹きつけ、水池内に焚し、「転輪聖王天尊」の号を唱える（14a-b）。

次に「分形鍊形大將軍符」を執り、「謹んで長生大帝君、丹靈分形大將軍孫庚・・・らを召す。従官将吏は飛行し変化するように。私の真霊を助けて、生気を撰（おさ）め降し、幽魂たちのために、化を受け更生させて下さい」と宣し、祖炁を符に吹きつけ、水池中に焚する。そして「五帝真諱呪」と「度魂真諱呪」を唱え、それぞれ「五方の炁」と「寅・卯・辰の三方の炁」を取り、救済する幽魂に吹きつけ、「随願往生天尊」の号を唱える（14b-15a）。この炁を取る方向は火鍊の部分で見たものと同様である。

## 6.8 鍊度終了の宣言

「靈宝登真度命出離生死符」を焚し、「天は慈しみにあふれているので、地獄に閉じ込められた亡魂あるいは祖先たち、三界の亡魂の罪は許され、罪を記した帳簿から削除される。精神・身体とも生まれ変わって天堂に登り、苦しみから解放され、陰の部分が除かれて、道に入り真に昇る」という呪文を唱えて、符を焚し、祖炁を取って、水池中に吹きつけ、「幽魂の身には玉光があり、つやがあって清らかで、容貌は厳かで、仙衣が愛らしい」と存思する。そして「宝華円満天尊」の号を唱える（15a-b）。

以上のようにして、仙界に上昇するにふさわしい新しい身体を得て、仙界に上る準備を整えていく。高功は再び「興生、獨隸、可韓、功都、保魂應魂攝」という「度魂呪」を黙誦する。そして「召丁甲金童玉女大將軍符」を焚し、「これまでの鍊度の功德はすでに周到なので、謹んで六丁六甲大將軍・金童玉女を召し、速やかに鍊度を終えた幽魂を、各の服装を整え、恭んで上帝御前に詣でさせ、ただ天恩を謝し、戒を受け符を伝え、登真・度品させて下さい。道士たちは虔誠に、迎導を行って下さい」と宣する。道士たちは「靈書中篇」を誦し、魂を引率して朝謁させる（15b-16a）。

以上に見てきた鍊度の儀礼について、その構成について考察していきたい。大きく鍊度を行う準備の段階と実際の儀礼の二つに分けることができよう。まず6.1でははじめに火鍊を行う火鍊池と水鍊を行う水鍊池を準備し、主神たる北極紫微大帝と南極長生大帝に祈願を述べる。次に6.2は火鍊池の調整のための儀礼、6.3は水鍊池

を整えるための儀礼を行う。次に実際の鍊度の儀礼が記述される。そして6.4では天尊・真人に降臨を願う。請神にあたる部分である。次に6.5では亡魂を壇に導き、6.6から火鍊の儀礼が始まる。まず第一段では亡魂たちを火池に導き、第二段では火炁による鍊成を行う。そして第三段で、「十二炁化生符」によって、腎臓、心臓以下十二の器官それぞれを再生していく。次に第四段で五方の真炁を亡魂に降し、第五段では火鍊によって陰の要素が消え、仙人にふさわしい身体を獲得したことを宣言し、第六段では「五帝真諱呪」と「度魂真諱呪」および「靈書中篇」を唱えて炁を吹き込む。ここは「疾病の治療」にあったように、新しい身体に再生したことを示しているのであろう。6.7からは水鍊が始まる。まず第一段では亡魂たちを水池に導く。第二段では関連の神々を招き、九つの炁を降しこれによって亡魂の鍊成を行う。第三段では『九天生神章経』に基づいて、胞・胎以下仙界に上昇するにふさわしい九つの器官が形成されていく儀礼が行われる。いわゆる「九天鍊度」といわれている部分である。第四段では坎炁や五方の炁などを亡魂に降し、第五段は火鍊6.6の第五・六段に対応する。そして6.8では、鍊度が終了して仙界にふさわしい身体に生まれ変わったことが宣言され、次の段階である伝符・授戒へ導く。

## 7. 伝符・授戒

最後に「靈宝普度大齋伝符授戒儀」を行う。これも巻28「靈宝大齋伝授戒符昇度亡魂儀」に対応している。

### 7.1 神々の招請

始めに高功は上香し、次のように宣する。「謹んで十方無極世界の現前に受度した一切の衆霊を召します。あなた方はここに浩劫以来苦根を結び植え、この輪廻を受け、休息することはなかった。・・・あなた方の身は道場に至り、各々よろしく深く謹んで、符・戒を受ける。今ここに帰依して、昔の過誤はすでに許された。この善果をもって、まさにますます修持に謹み、常に信奉の心を堅くし、もって生成の徳に報いるべきである。一切の鬼神たちは、誠心によって皈命し、仰いで天恩に謝し、稽首再拝するように」（16a-b）。

そして道士たちは「靈書中篇」を唱え、衆魂を引率して、説戒所に至る。道士たちは恭しく序立し、高功は座に到り手炉の香を上げて、次のように請願し祝する。「今日道場は清浄で、大衆は一同各々心をめぐらし、謹んで現前の六道の衆生・孤魂滞魄・一切衆霊のために、

稽首して太虚三元・七真空境・無極妙道・九気洞霊・元始無量化身天尊、十方大聖諸君丈人、三十六帝、靈宝五師君らをお招きする。・・・伏して願わくは、慈を垂れて請を受け、感に応じて輝きを分け、今を以て道場に降臨し、受戒を証明せんことを・・・」。そして「十方靈宝天尊」の号を唱える(16b-17a)。正薦の儀礼の場合はここで説教を行う。

## 7.2 授戒

高功は座に登り、次のように宣する。「私は今仰いで道の力を承け、あなたたちのために、大戒師となる。あなたたちが無量劫より以来、大道を信ぜず、真乗を悟らない、・・・あなたたちは諦聴して心にとめなさい。私は今あなたのために、顕かに九真妙戒・金籙白簡を説きます。功德を受持すれば、難を抜き苦を済う。神力は量りがたい。衆霊は稽首して、伏して教命を受けるように。今玄科によって聖に対して伝授する。まさに一心に諦受して忘れることのないように」(17b-18a)。そして「慈悲説戒天尊」の号を唱え、九戒を説く。九戒は「第一戒は敬讓であり、父母に孝養であること。第二戒は克勤であり、君主に忠を尽くすこと。第三戒は殺さず、衆生を慈しみ救うこと。第四戒は不淫であり、身を正して物を處置すること。第五戒は盗まず、己を損なっても義を貫くこと。第六戒は嗔(いか)らず、怒りに任せて人を傷つけることをしない。第七戒は詐らず、賊に諂い善人を害することをしない。第八戒は驕らないこと。第九戒は二心を抱かず、戒を一途に守ること」であり、内容は巻28に説くものと同様である(18a-b)。

## 7.3 長生符・救苦符の伝授

続いて「いま戒を伝えたので、次に籙・符を伝授する。願わくは三宝の師尊が証明して下さいますように・・・宝籙・靈符を謹んで宣告いたします」という内容の文を唱え、「長生符」、「救苦符」、「生天寶籙」を傳授する。まず「長生符」・「救苦符」の伝授にあたっては、次のように存思する:上帝が金童玉女に勅して、籙簡を捧げ、金光に乗じて、天門より降る。そして道士は籙を執り、香上を通過させ、「・・・五苦を超え離れ、雲駢に乗駕する。転輪して道を得て、上清に飛昇するように」と亡魂に告げる(18b-19a、この祝文は巻28にはない)。巻44に載せる「救苦符」の告文では、十方無極世界三官九府百二十曹・五帝考官らの冥界の関係役人に対し、救済の対象となる亡魂(普渡の場合は六道四生、孤魂滞魄となる)が地獄を出離して、罪が許され恨みが消えて、授けられた戒と齋の功德により、天堂に登れる

ように告げている。一方「長生符」の告文は、鍊度に関係する役所や神々に対して発せられ、鍊度を受けて天堂の名簿に載り、齋の功德によって天堂に生まれるようにという主旨になっている。告文には符の効用が明確に示されている。

## 7.4 生天法籙の伝授

次に「生天寶籙」を伝授する。道士は籙を執り、香上を通過させ、「・・・永く三塗・五苦・八難を度し、三界を超え凌ぎ、上清に逍遙する」と告げる(この祝文は巻28と共通)。「生天寶籙」は十方三界の九幽主者(地獄の長)に下されるもので、「某所の誰その言葉により、何月何日よりここに靈壇を建立して、齋を行い、符命を宣して、九幽(地獄)を開放し(亡魂を)救済して、善功を積み、それらをすべて誰その救済に資する。そのことをすでに上帝に奏上し、勅命を降して施行させることを願ったほか、諸天の天尊に奏して命を發し、また三界の真司に申状を發し、その下の役所に牒状を發して、誰その亡魂等を壇に赴かせ、罪垢を懺悔して消し、まさに齋を行った功德を受けようとした。なお救済する亡魂等が、業や因縁に依って、獄に拘留され、齋壇に赴けず、真人に参謁できず法が聴けないのを考慮し、太上勅赦生天寶籙を降し罪を許し、苦趣を離れられるようお願いする。今勅命により、十方三界の九幽主者(地獄の長)に告下する」という内容からなっている。そして符籙が記された後、「太上生天寶籙を奉じ、救赦亡故(某乙)等魂、および六道四生、孤魂滞魄、地獄に囚われた罪魂たちは。先の世以来、今日に至るまで、三業・六根により、造諸の罪惡を造りだしてきた、あるいは手ずから君・父を弑し、二親に不孝であった」として、以下さまざまな罪惡が数え上げられる。そして「積劫以来のあらゆる諸罪は、みな罪簿から消され、悪根を除かれる。拘留されることなく、ただちに仙界に昇り遷ることができるよう」と述べられている。さらにこれらの符籙を得たことを祝して「まさに願わくは六道四生の孤魂滞魄たちは、受持のあと、名を紫策に書き、命を朱陵に渡し、大罪を九幽に消し、地戸を抜けて、遂に三界を超え凌ぎ、天門に拘せられることはない。それで須く再び天仙を召して、特に(彼らを)護り送って、各々珍重を加えるように」と告げる(19a-b)。巻44に載せる「生天寶籙」の告文によれば、告文は十方三界の九幽主者に対して発せられ、重点は六道四生、孤魂滞魄の罪を許し、救済の対象となる亡魂とともに、仙界(天堂)に生ずることができるようという内容になっている。すなわちこの「生天寶籙」は普渡のために発せられる文書であ

り、正薦の亡魂に対して発せられる諸文書に対応しているが、このことについては正薦についての論の中で改めて考察したい。

### 7.5 護送の将吏

次に彼らを加護し送り届ける役目を持つ将吏である、諸司法院天神将吏・受事功曹・六丁六甲大將軍・金童玉女・五雷神将を召し、「普く亡魂を救済し、法・經を聴かせ、符・戒を伝授した。今は法事はほぼ終えたので、保護を加えて留滞することなく、仙界に送り届けてくれるように」と告げ、次のような内容の帖文を宣する。「神々は下化し、有縁の者のために心をいためる。靈宝は儀式を受けて、無量の人々を救済する。遂に幽界の亡魂をみな大道の恩光に浴させる。救済の名簿に名を書し、朱宮で（鍊度によって）身体を新たにす。雲の道は遙かで、羽の袖は飄揚する。永く輪廻を断ち、好く壇を辞して去る」（19b-20a）。すなわちその前の祝文の内容と同じく、輪廻を断ち仙界に上昇する資格を得たので、壇を離れて上昇するようにというものになっている。

### 7.6 功德の回向

そして「隨願往生天尊」の号を唱え、最後に普渡の功德を回向するように願う。「これまで謹んで黄籙大齋主（だれそれ）のために、亡くなった親族だれそれを薦拔し、六道四生・孤魂滞魄を普く救済した。種々の功德は、みな既に遍く円満である。願わくはこの道の恩が一族に回向するように。みなが道の成果が得られ、欲と迷いの道に落ちないように。法橋を平安に歩み、速く道の岸に登る。三塗は対を罷め、九夜は酸を停め。法界の衆生は、時に安んじ柔順に身を処する。普天率土（天下至る所）は、道を悟り真を修める。終に願わくは臣の身が永く道蔭に依ることを」として、以下に元始天尊などの神々を列挙し、その功德を称えている。齋を挙行するのは、一つには亡魂を救済し、合せて広く孤魂たちを救済することが目的であるが、一つにはその功德が「一族に回向」することを祈願することが目的である（20b-21a）。このことがこの祈願文にははっきりと表明されている。

### 7.7 諸文書の焼却

次に門外に往き、帖・牒・符籙を焚化し、道士たちは「(亡)魂の精神は澄み正しく、万炁は長く存する。(彼らは)苦悩を経ずに身に光明が有る。功德は円満に成就し、上清に逍遙する。急急如長生大帝敕」という「焚簡

頌」を唱え、続いて「化生呪」、「化牒呪」を默念し、「宝華円満天尊」の号を唱える。高功は「火鈴が地を満たし、烜赫（盛ん）たること日のようで、天地に亘って徹し、度を受けた靈魂は金光に乗って去る」と存思する。そして「これまでの開度の功德は悉く既に円満で、再び清浄な人たちにより、よい因縁となり、大聖元始天尊・太上大道君・太上老君の不可思議な功德を思う」と唱えて終了する（21a-b）。

これら一連の普渡儀礼の最後は、仙人にふさわしい身体・精神を得た亡魂のその証明として戒を授け、符籙を与えることによって、昇仙を保証する儀礼である。まず7.1では亡魂が救済を受け生まれ変わったことを宣言し、神々を儀礼の場に招く。そして7.2でまず道教の基本的な戒である九戒を授ける。続いて7.3では「長生符」、「救苦符」を、7.4では「生天宝籙」を授ける。「生天宝籙」は普渡に特有の文書で、「過去世に犯してきた罪過を除かれ、地獄に拘留されることなく、仙界に昇ることができる」という内容を持っている。そして7.5では亡魂たちを仙界に導く役目を持った将吏を招いて命を下し、7.6では普渡の功德を、この儀礼のスポンサーたる齋主一族に回向するように願う。そして7.7で諸文書を焼いて天界に届けて儀礼を終了する。

## 8. 仏教の普渡儀礼との比較

前論では、不空訳とされる『瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口儀軌經』の施餓鬼儀礼について、そこで唱えられる真言と結ばれる手印は、現在用いられている普渡のテキストの一つである『瑜伽焰口施食要集』とほとんど変化がないことを指摘した<sup>33</sup>。この章では『瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口儀軌經』に説かれた施餓鬼儀礼との比較を通じて、道教と仏教との影響関係を考察する<sup>34</sup>。この儀軌の成立年代に関しての議論は、紙数の関係から次稿に譲ることとしたいが、唐末以後から北宋のころまでには成立していたものと考えられる。

この儀軌では、はじめに『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』の概要を記し、次にまず施餓鬼の儀礼を行う壇の配置を記載する。次に一切諸佛、冥界の官吏、餓鬼や先亡などを招く。この儀礼の目的は、餓鬼や祖先など様々な鬼神が甘露の飲食を受けて、菩提心を発し、三宝に帰依し、無上道に向かうこととされている。そして施主は諸仏・聖賢・諸業道を供養し、また僧侶たちを供養した後、儀式が始まる（p.468下-470中）。

始めに破地獄印を結び、真言を唱える。この印呪の威力により、あらゆる諸趣地獄の門は、この印呪に随っ

て豁然として自から開くという。次に召請餓鬼印を結び、真言を唱える。召請に従ってみな雲集し、慰め諭すことによって、法を渴仰する心を起こさせるとしている。次に召罪印、摧罪印、定業印、懺悔滅罪印を結び、真言を唱える。これらによって、「諸仏子たちは既に懺悔し終わって、百劫の間に積み集めた罪は、一念でにわかには蕩除される。火が枯草を焚くように、余りなく滅しつくす」とされる。そして妙色身如来施甘露印を結び、施甘露真言を唱える。真言を唱える時は、「忍願上に一鏝字があると想う。(そこから)般若甘露の法水が流出し、空中に弾み洒ぐ。一切の餓鬼・異類・鬼神は普く清涼を得て、猛火は息滅する。身田は潤澤し飢渴の想いを離れる」という。次に開咽喉印を結び、真言を唱える。餓鬼の喉は細くなっていて食事ができないという思想に基づいている。この印を結び、真言を唱えることで、喉は自から開くとされている (p.470中-下)。

続いて七人の如来の名号を唱えていく<sup>35</sup>。これによって、三塗八難の苦を離れさせるとされている。始めに「南無寶勝如来」(この名号を聞けば煩惱や悪業はみなすべて消滅するという)、「南無離怖畏如来」(常に安楽を得て、永く驚怖を離れ清浄快樂であるようになる)、「南無廣博身如来」(細い喉が広がり、地獄の業火が停められて、清涼さがゆきわたり、受ける飲食は甘露味を得る)、「南無妙色身如来」(醜陋な姿を受けず、諸根は具わり、相好は円満で、特に勝れて端嚴であり、天上の人間のうち第一であるようになる)、「南無多寶如来」(財宝を具え、心に適い、求めることは無限に受用できるようになる)、「南無阿彌陀如来」(西方極樂世界に往生でき、蓮花の上に化生して、不退転の地に入る)、「南無世間廣大威徳自在光明如来」(五種の功徳を獲得する)。この七如来の名号を唱えた後、まず仏・法・僧の三宝へ帰依させる。そして菩提心を起こさせ、発菩提心印を結び、真言を唱える。次に三昧耶戒印<sup>36</sup>を結び、真言を唱える。すなわち「三昧耶戒を受けさせ、今より以後は、あなた方は如来の位に入り、真の仏子として法に従って化生し、仏法の分を得る」とされている。すなわち一連の如来の名号を唱えることによって、苦界を離れて悟りへと導き、この三帰依、発菩提心、受三昧耶戒という一連の手続きによって、亡魂を仏弟子とさせるという形になっている (p.470下-471中)。

次に無量威徳自在光明如来印を結び、左の掌に鏝の字があり、そこから種々の無量の甘露法食が流出すると観想する。そしてまず施食真言を唱え、一食が変じて無量の食となると観じる。また同じ印を結び、乳海真言を唱える。すると印中より甘露が流出して乳海となり、法

界に流れ注ぎ、普く一切の有情を済い、充足飽満すると観想する。次に普供養印を結び、真言を唱える。その下の部分には次のような文章が載せられている。あるいはこの部分が上奏文にあたるのかもしれない。「私某甲は如来の教えにより真心よりすべてを捨て、この無遮の広大なる法会を設ける。あなた方は今日この勝れた善き戒品に遇って身を霑し、過去世において広く諸仏に仕え、親近・善友とともに三宝を供養した。この因縁により善知識の菩提心を発するに値する。成仏を誓願して餘果を求めず、先に道を得る者は相互に超度解脱する。また願わくはあなた方は昼夜に常に、私を擁護して願うところを満たし成就させてください。この施食が生ずる功徳をもって、普く法界の有情に回向し、諸の有情と共に同じくこの福をもって、尽くみな無上菩提一切智智に回向し、他の成果を願ってはいけない。願わくは速く成仏することを」。そして奉送印を結び、金剛解脱真言を唱えておわる (p.471中-p.472上)。

その後この儀礼を行うことの功徳が説かれ、最後に仏が阿難に向かい、「お前は私の言葉に随い、法のように修行し広く宣して流布させ、多くの短命・薄福の衆生に、普く見聞することを得させるように。常にこの法を修すれば、寿命は延長し福徳は増長する」と説く。(p.472上-中)

この順序からすれば、まず破獄印によって地獄から亡魂を解放し、次に召請餓鬼印によって餓鬼を儀式が行われる壇へと召請する。そして召罪印、摧罪印、定業印、懺悔滅罪印によって、それぞれ罪障を引き出して、余すところなく砕いて消滅させ、三悪趣の業を浄め、懺悔して罪障を滅するとされる<sup>37</sup>。そして妙色身如来施甘露印によって、甘露が流れ出して餓鬼は清涼を得て、飢渴の念から解放され、開咽喉印によって喉が開通する。次に七如来の名号を聞くことによって、三塗八難の苦から解放される。しかし七如来それぞれの印の説明では、煩惱や悪業がみなすべて消滅し、永く驚怖を離れて清浄快樂となり、細い喉が広がり、地獄の業火が停められて、清涼さがゆきわたり、受ける飲食は甘露味を得、相好は円満で、勝れて端嚴であり、求めることは無限に受用できるようになり、西方極樂世界に往生でき、五種の功徳を獲得するなど、これらの過程はこの儀礼全体が亡魂の上にもたらす救済の内容が集約されている。その後三宝に帰依させて、菩提心を起こさせ、戒を授ける。そして無量威徳自在光明如来印によって、食物が無量の甘露法食に変じ、普供養印によって諸仏・聖賢あるいは諸の有情を供養し、奉送印によって諸仏を送り、亡魂は超昇を得るといふ。

以上の過程は、第7章までに見てきた道教の普渡と大きくは変わらない。罪業から解放されて、甘露の法食を食することにより飢渴の念から解放され、三宝に帰依し、戒を授けられて往生を遂げるという形である。大きな相異点として次のような点が指摘できよう。

まず道教の儀礼の場合、一つ一つの過程で重要な役割をはたしてきたのは符と呪文であったが、仏教の場合は手印と真言すなわち呪文であった。この点ではオーゼック氏のいうように、道教では符の役割が重要というのは、正しい指摘といえよう<sup>38</sup>。次に道教の儀礼の大きな特色は、冥界の官僚組織の存在を前提とした、各種の文書や証明書の発行とその手続きが重要な位置を占めていることである。特に最後の伝符・授戒は、この中には三帰依や授戒など仏教と共通する部分もあるが、ほとんどがこの文書の発行とその手続きに費やされており、他の部分でも各種文書の発行は重要であり、符の発行もこれに入るとも考えられる。また道教の儀礼に独特なものは、疾病の治療や、沐浴、錬度などであるが、それらはたとえば疾病の治療は死者といえども五体満足でなければ、満足な転生ができないという中国の信仰が強く反映しており、沐浴も最高神に朝謁するために必要とされている。そして錬度は仙人の身体に変化するという道教的な発想による儀礼であり、これらが付け加えられている。あるいは「南無妙法身如來」の「醜陋な姿を受けず、諸根は具わり、相好は円満で、特に勝れて端嚴であり、天上の人間のうち第一であるようになる」という部分は、その中国的発想を反映した儀礼として成立したものなのかもしれない。道教の儀礼では罪の懺悔の部分は欠いているが、経とともに法懺を読むことは早くから行われており、その点では他の独立した儀礼として存在しているといえよう。

しかしここで見てきた『瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口儀軌經』にも、中国的な特色が見出される。たとえば「もし法をなそうとするなら・・・定めて日を知り已り浄地を選択する」と述べられているところは、中国では現在でも儀礼を行う時には、必ず術士に依頼して択日を行い、適切な日時を選択する。そして浄地を択ぶというのも、風水を観るのと同様中国的な配慮といえる。そして施食の場合に「石榴桃樹の下に瀉ぐを得ず。鬼神懼怖してこれを食するを得ず」とあるのも、中国的な信仰が反映されているといえる。すなわちこの儀軌も翻訳とはなっているが、ここには中国的な信仰・思想が反映されている部分がかかなりあることが指摘できるのである。

また道教の黄籙齋としばしば対比されるものに仏教の水陸齋がある。その儀礼の構成については、宋の志

磐撰・明の祿宏重訂になる『法界聖凡水陸勝會修齋儀軌』に基づいて前論で考察したが、施餓鬼の儀軌に比べて「沐浴真言」、「治衣真言」等が増えている<sup>39</sup>。これらは道教の儀礼では、亡魂が天尊に朝謁する前に行う儀礼と位置付けられている。あるいはこの儀礼については水陸齋が道教の普渡から借用したのではないだろうか。水陸齋については、いくつかの先論がありまた専著も出ているが、志磐の儀軌に見える内容がいつごろ完成したかについては触れられていない<sup>40</sup>。道教の普渡が仏教の施餓鬼儀礼からかなりの部分を参考にして成立したことはすでに指摘されており、ここではその内容を具体的に分析してきたが、水陸齋の儀礼の構成は、施餓鬼の儀礼よりも道教の普渡あるいは黄籙齋の過程に接近しているともいえる。このことは道教と仏教が、相互に影響し合って儀礼を完成させていった状況を示しているのではないだろうか。このことについては改めて論じることにした。

## おわりに

ここでは「立成儀」に見える普渡儀礼を詳しく紹介し、最後に仏教の普渡儀礼と比較しその特色を論じてきた。道教の普渡儀礼はその全体の構成は、仏教の普渡儀礼に倣って形作られたといえてよい。しかしここで見てきたように、そこにはかなり道教独自の方法や手続きが盛り込まれている。また道教の普渡と比較した仏教の普渡儀軌にも、中国的要素が見られる部分があり、成立も不空の時代よりかなり遅れるとみられる。そのためここに見られるような普渡の手続きが成立するにあたっては、道教と仏教が相互に影響を与えてきたという関係があったのではないかと思われる。

しかしここでは、黄籙齋の施主が救済の主たる対象とする祖先のための一連の儀礼の過程を、普渡の儀礼と比較しながらどっていき、祖先のための儀礼と正薦の儀礼それぞれにおいて、強調されている点の違いについて考察することは果たせなかった。これら二つの儀礼がどのような関係にあり、仏教の普渡の影響を受けて、どのように独自の普渡と正薦（葬送）の儀礼を形成していったかということについては、今後の課題としたい。

## 附記

本論文は、科学研究費補助金(25370043)「道教の普渡儀礼の成立と現状」の助成を受けた成果の一部である。

## 註

- <sup>1</sup> 『春秋左氏伝』昭公七年。
- <sup>2</sup> 関智亭. “施食科儀”. 道教儀範. 新文豊出版公司, 1995, p.166-182.
- <sup>3</sup> 彭理福. “鐵貫施食科儀”. 道教科範. 宗教文化出版社, 2011, p.441-457.
- <sup>4</sup> 任宗權. “施食科”. 道教科儀概覽. 宗教文化出版社, 2006, p.341-346.
- <sup>5</sup> 袁瑾. “佛教《瑜伽焰口》與道教《鐵罐施食》儀式的象徵符号及其意義”. 佛教, 道教視野下的焰口施食儀式研究. 宗教文化出版社, 2013. p.63-156. ここでは手印、呪文、儀式構成について別々に考察しており、比較も行っている。
- <sup>6</sup> 関氏前掲書 p.170によれば、このテキストは『太上清微濟煉救苦鐵罐鴻儀』の簡略版という。
- <sup>7</sup> 張澤洪. 步罡踏斗：道教祭礼儀典. 四川人民出版社, 1994, p.249.
- <sup>8</sup> 陳耀庭. “「大三清」與太乙煉, 斗姥煉の比較研究：兼論華南道教與江南道教科儀的異動”. 香港及華南道教研究. 2005, p.294-306.
- <sup>9</sup> 黎志添. 《先天斛食濟煉幽科》考：一部廣東道教科儀本的文本源流研究. 中國文化研究所學報. 2010, no.51, p.117-141.
- <sup>10</sup> 大淵忍爾. 中国人の宗教儀礼. 福武書店, 1983, p.725-742.
- <sup>11</sup> 前掲書 p.594-613.
- <sup>12</sup> 徐宏圖・薛成火. 浙江蒼南縣正一道普度科範. 天馬出版有限公司, 2005. ここでは第四章「水南派」及其“普度”儀式で源流が考察され、現在の普渡儀礼の構造が『靈宝領教濟度金書』に見えるものと似ていることが指摘されているにとどまっている。現在の普渡儀礼については、第五章の特に第十場「放焰口」・第十一場「大普施」で紹介されている。
- <sup>13</sup> 松本浩一. “宋元時代的普渡文獻”. 中國地方宗教儀式論集. 香港中文大學崇基學院宗教與中國社會研究中心, 2011, p.659-94.
- <sup>14</sup> 齋は道教の大規模な儀礼で、すでに北周時代に編纂された『無上秘要』には、九種類の儀礼書が収められている。唐代には盛んに行われて発達を続け、『唐六典』にはこれらが皇帝の誕生日や忌日、あるいは三元日などに行われたことが記されており、七種類の齋があげられている。黄籙齋はそのうちの一種類で、主として死者の救済のために行われるが、宋代になると様々な目的で行われるようになっていった。
- <sup>15</sup> 松本浩一. “中元節の成立について：普渡文獻の変遷を中心に”. 改革・変革と中国文化, 社会, 民族. 日本評論社, 2008, p.219-37.
- <sup>16</sup> E.Davis.Society and the Supernatural in Song China. University of Hawai'i Press, 2001, p.227-241. 松本浩一. “宋代の水陸齋與黄籙齋”. 第一屆道教仙道文化國際學術研討會論文集. 國立中山大學, 2006, p.646.
- <sup>17</sup> 「立成儀」卷57「宋冲靖先生留君伝」。
- <sup>18</sup> 「立成儀」卷57「附録修書本末」
- <sup>19</sup> Kristofer Schipper and Frsniscus Verellen ed. The Taoist Cannon.Vol.2, The University of Chicago Press, 2004, p.1014-8.
- <sup>20</sup> 炁は氣と同じ意味を表し、隋唐時代までは道教文獻の中でも、特に用法が区別されてはいなかったが、内丹文獻の中では、炁は先天の氣を、氣は後天の氣（呼吸している氣）を表すようになった。ここでは原文に従った。
- <sup>21</sup> 存思は、神々の姿を目の前に実際に存在しているように思い描くことをいい、道教の修行法の一つである。道教の呪術儀礼では、このように思い描いた神将・神兵の力で、神々に文書を送り届けたり、妖怪や鬼を駆逐したりする。
- <sup>22</sup> ここでは紙数の関係で原文を表示せず、道蔵の卷数と葉数を示す。卷数は本文の初めに示しているのので、引用文のあとに葉数のみを示したが、複数の巻を参照している場合には、卷数も示して混乱のないようにした。道蔵は台湾・藝文印書館版『正統道蔵』を用いた。
- <sup>23</sup> 『雲笈七籤』卷51「流金火鈴」によれば、「流金火鈴は、太上道君が遊宴する際の円光によって、上は九天の威を振るい、下は六天の凶を滅する」という。また『靈宝度人經』には「擲火萬里、流鈴八衝」という句があり、嚴東の注には「左右の流金火鈴のことで、ひとたび投げれば万里にわたって輝く光が流れ、交錯して虚空の中に充滿し、魔鬼を消滅させる」としている。邪鬼妖魔を滅する力を持つ火光を指すといえよう。
- <sup>24</sup> 普渡で用いる呪文については、普渡の構成を他の儀礼書と比較しながら論ずる際に、詳しく論ずる予定なので、ここでは比較的短いものや、すでに考察の対象になっているものなどを除き、主旨のみ紹介することにしたい。
- <sup>25</sup> 「墨黒、襪臘、靈寶、紅杏、磨真、急急如長生大帝勅奉行」という内容を持つ。
- <sup>26</sup> 「興生、獨隸、可韓、功都、聚魂、對魂攝、急急如長

生大帝敕」という内容を持つ。

- <sup>27</sup> この部分の「五嶽」はあるいは誤りかも知れない。
- <sup>28</sup> 卷42によれば、符の内容は脳・目・耳・心・肝・脾・肺・腎・陰・胞・胎・結・節・血・精・気・神・命からなっている。「大洞十八玉符」は正薦の召魂儀にはない。「召五神混合符」は存在しているが、唱える祝文は内容が異なり、「混洞太無天寶の炁」以下二十六種類の炁を召請している。
- <sup>29</sup> 「靈書中篇」は、「大梵隱語」などともよばれ、『靈寶度人經』に含まれている呪文のような句からなる。「立成儀」でも後者の言葉で言及されることがあるが、本稿では前者で統一した。
- <sup>30</sup> 烈火流金については、流金火鈴という言葉について注12) でふれたが、ここでは単に朱陵火府から真火を呼び寄せる意であろう。
- <sup>31</sup> 午は南にあたり火に対応する。同様に水練の際に取る子炁は、子が北で水に対応する。
- <sup>32</sup> 道士の左手の中指から小指の各関節に十二支が割り当てられており、左手の親指でこのポジションを押さえていく。午は南に割り当てられ五行では火に当たる。同じく水池の儀礼で「子に至る」というのは子が北・水に当たるためである。
- <sup>33</sup> 松本浩一. 中元節的產生與普度的變遷. 民俗與文化, 五号, 2008.
- <sup>34</sup> この儀軌は「大正新修大藏經」の第21巻に収録されているが、以下では引用についてはそのページ数を示すことにする。
- <sup>35</sup> 『瑜伽集要焰口施食儀』（大正蔵、1320）や、祿宏重訂の『修設瑜伽集要施食壇儀』（続蔵経、1080）では、この七如来に対応する手印が記述されているが、『瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口儀軌經』には手印のことは見えない。
- <sup>36</sup> 『瑜伽集要焰口施食儀』、『修設瑜伽集要施食壇儀』では、三宝印も記述されている。
- <sup>37</sup> この解釈は『瑜伽集要焰口施食儀』に示されている。
- <sup>38</sup> Charles D. Orzech, “Feng Yankou and Pudu: Translation, Mrtaphor, and Religious Identity”, in Livia Kohn and Harold D. Roth, eds., *Daoist Identity: History, Lineage, and Ritual* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2002).
- <sup>39</sup> 前掲. “宋代的水陸齋與黄籙齋”. p.646.
- <sup>40</sup> 牧田諦亮. “水陸会小考”. 中国近世佛教史研究. 平楽寺書店, 1957. 洪錦淳. 水陸法會儀軌. 文津出版社, 2006. など。

(平成27年 3月10日 受付)

(平成27年 7月21日 採録)